報　　告

公開講座抄録

Towards a Social Psychoanalysis
社会的精神分析に向けて

（2022.11.20　於：キャンパスプラザ京都）

講　　師：Roger Frie　（京都大学大学院教育学研究科客員教授　サイモンフレイザー大学教授）
通　　訳：揖 斐　衣 海（KIPP 渋谷心理オフィス　国際基督教大学カウンセリングセンター）
司　　会：松 下　姫 歌（京都大学大学院教育学研究科教授）
挨　　拶：田 中　康 裕（京都大学大学院教育学研究科教授　附属臨床教育実践研究センター長）

ご 挨 拶

田中　康裕（京都大学大学院教育学研究科教授　附属臨床教育実践研究センター長）

皆さん、何年かぶりかの開催になるのですけれども、こうやって公開講座を開催できるようになりました。とても嬉しいなと思います。キャンパスプラザという、きれいな広い会場をとりまして、これから Frie 先生のお話を伺っていきたいと思います。我々のセンターにはユング派の先生や対象関係論の先生がお見えになることが多かったですけども、今日は対人関係学派の立場の先生がいらっしゃっていただけて、この『社会的精神分析に向けて』というのは、皆さんにとっても我々にとってもあまりなじみがないというか、フレッシュな、そういうテーマであると思いますので、皆さん楽しみに聞かせてもらいましょう。私も今日、講義を聞かせてもらうのをとても楽しみにしています。今日はご参集いただいてどうもありがとうございました。

司会（松下）：田中先生、ありがとうございました。それでは今回、ご登壇いただく先生方のご紹介をさせていただきます。今回の公開講座の講師をお務めくださるのは、Roger Frie 先生です。Frie 先生はカナダの名門校である、サイモンフレイザー大学教育学部の教授であり、今年度、京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センターの客員教授として、ご着任いただいております。専門が精神分析であり、特に個人の心に根深く組み込まれている社会や文化の影響についての研究と臨床実践に取り組んでおられます。それらの関係をもとに多くの著書や論文を発表されており、中でも単著『Not in My Family: German Memory and Responsibility After the Holocaust』（2017 年）（Oxford University Press）は、数々の賞を受賞されており、我々の記憶

というものがいかに我々の歴史的・文化的な過去から形成され、かついかに社会的・政治的環境によるフィルターがかかってしまうものなのか、あるいは不確実さに耐えられずに確かさに縋ってしまうものなのか、そしてそのような問題についてどのように対応していくのかについて示す論考として高く評価されております。今回は、社会的精神分析を発展させたエーリッヒ・フロムを取り上げ、現在の人間の心が直面している社会的・環境的危機にどのように取り組んでいけるのかについて、ご講演いただきます。

もう一方、通訳を務めてくださるのは、揖斐衣海先生です。揖斐先生は、現在、KIPP 渋谷心理オフィス/臨床心理士・公認心理師、そして国際基督教大学のカウンセリングセンターカウンセラーとしてご活躍されております。専門は、精神分析的心理療法で、通訳・翻訳にも定評があり、2021 年に金剛出版から公開された『こころの出会い』では、Lewis Aron の『A Meeting of Minds』の翻訳を分担されております。この後、Frie 先生に約 2 時間、揖斐先生に通訳をしていただきつつ、ご講演いただきます。そしてその後、少し休憩を挟みまして、16 時までフロアの皆様との質疑応答の時間を持ちたいと思います。質疑応答につきましても、揖斐先生に通訳をお願いしております。それでは、Frie 先生のご講演「社会的精神分析に向けて」です。皆様大きな拍手でお迎えください。

第 1 部　講演　社会的精神分析に向けて

Roger Frie　（通訳　揖斐衣海）

私は、人口 250 万人のカナダ第 3 の都市、バンクーバーに住み、働いています。そこはカナダの西海岸に位置し、海、山、温帯雨林に囲まれた美しい自然で知られています。バンクーバーに到着してまず感じるのは、杉の大木の香りです。この街は温帯雨林の中にあり、一年の大半はじめじめとした雨に見舞われます。この雨のおかげで、杉は大木となるほどに成長することができるのです。

こうしたすべてが、ほとんど一夜にして変わってしまいました。1 年余り前の 2021 年の夏のことです。カナダの西海岸はこれまでの記録を塗り替えるほどの異常気温に見舞われました。この暑さは森林火災を引き起こし、広大な面積を焼き尽くし、またもや記録を塗り替えました。バンクーバーから車で数時間の小さな町、リットンでは、カナダの観測史上初の気温である摂氏 50 度を記録しました。その翌日には、山火事が起こり、町全体がすっかり焼け落ちてしまいました。ほとんどの住民は逃げ出すことができましたが、炎に焼かれた住民もありました。

異常気温の数ヶ月後、バンクーバーは多くの森林火災の煙に包まれ、保健当局は警告を発しました。人々は屋内にとどまり、窓を閉めるよう言われました。カナダの西海岸の住宅やビルは、日本と違ってエアコンがありません。夏でも気温が 25 度以上になることはほとんどなく、蒸し暑くもありません。バンクーバーはアウトドアの街として知られ、海とビーチに囲まれています。しかし、人々は外出したいとも思わなければ、実際に外に出ることもできませんでした。街は閑散としていて、パンデミック時のロックダウンのような、人気のない街並みがまた戻ったように感じられました。人々が平穏な生活を取

り戻したいと思っていた矢先に猛暑と森林火災がおきたのです。人々は外に出ることなく、屋内に留まることを余儀なくされ、暑さと煙のために、多くの高齢者が亡くなりました。環境災害による死者数としては、カナダ西部の歴史上最悪のものとなったのです。私たちが生きていく上で、呼吸する空気ほど当たり前のものはありません。しかし、その空気を吸えなくなったとき、それは何を意味するのでしょうか。このような状況をどのように捉えればよいのでしょうか。パンデミックに直面したとき、多くの人が感じた無力感は、気候災害に直面したときの恐怖と不安を増幅させました。

今年の夏は違いました。７月上旬まで、じめじめとした雨が続きました。誰もが安堵を覚えました。気温は平年よりやや高い程度でした。しかし、夏が過ぎ秋になっても、太陽は輝き続け、雨が降ることがありません。実際、バンクーバーでは 90 日以上も雨が降らず、多くの地域で干ばつによる非常事態宣言が出されたのです。

カナダの西海岸に何万年も前から暮らす先住民は、長い間、警鐘を鳴らしてきました。しかしこれまで、耳を傾けようとする人はほとんどいませんでした。先住民の生活と文化の中心的な象徴は、西海岸のサケです。過去数十年間、産業による浸食と乱獲の結果、産卵のために戻ってくるサケの数は減少しました。今年は干ばつが問題を悪化させました。サケが産卵場所まで戻ろうとして遡上する川の多くは、ほとんど水がない状態でした。遡上できるところまで遡上し、卵を産む前に死んでしまったのです。汽水で淀んだ川に鮭の死体が溜まっている写真が、ニュースで流されるようになりました。

サケが産卵せずに死ぬと、サケの生命のサイクルが途絶えてしまいます。サケの一世代が失われることは、計り知れない影響を及し、何千年も続いてきた生態系が壊れ始めます。自然は自己修復できるのでしょうか？サケは先住民の文化的生活の中心にあるだけでなく、沿岸部全体の自然生息地に不可欠な役割を担っています。サケが産卵を終えて死ぬと、その腐敗した体は土壌や樹木に不可欠な栄養分を提供します。健康な木々、そして水がなければ、温帯雨林は簡単に燃えてしまうのです。災害の一つひとつが、次の災害につながっているようです。

先住民は、常に自然と調和して生きてきました。それに対して、北米にやってきたヨーロッパからの入植者たちは、自然を征服するもの、自分たちが利益を得るために利用するものと考えていました。個人的な欲求を優先させたのです。彼らは、自分たちが自然生息地の一部であり、自然に依存していることを理解し損ねました。まさにこの生命のサイクル、つまり、私たちは常に、そして必然的に、周囲の環境の一部であり、周囲で起こることに依存し、それによって形成されているという事実が、今日の私の講演のテーマなのです。私たちが長い間、当たり前のように享受してきた環境は、今、危機に瀕しています。私はこうした言葉を、恐怖と不安なしに話すことはできません。麻痺しているような感覚もあります。危機があまりにも大きく、地球温暖化の問題がどうにもならないと思われるとき、私に何ができるのでしょうか。このような不確かさを前にすると、目をそむけたくなる衝動に駆られます。そこで私は、自分が知っていること、確かな手ごたえを感じられることに集中し、その違和感や不快感に対抗しようとします。

この一年、私の心理療法の実践では、天気の話をすることが普通になっています。カナダ人は、イギリス人と同じように、頻繁に「天気の話」をすることで知られていますが、礼儀正しいイギリス英語では、天気の話は世間話や、会話の途中に生まれる沈黙を埋めるための方法です。しかし、臨床実践での

天気の話は違います。それは恐怖であり、不確かで、分からない、実存的な不安に満ちています。私も例外ではなく、患者が私と共有している感情を認識しています。おそらく、もしみなさんもそういう経験に身をゆだねられるなら、不安や不確かさを経験されるだろうと思います。

何年も前、私がニューヨークで精神分析家になるための訓練を受けたとき、気候の危機などという話はまったく出てきませんでした。それどころか、その考え自体が馬鹿げているように思えました。マンハッタンのコンクリートの通りやタワーほど、自然から切り離された場所はないでしょう。今日、私はしばしば、気候危機の現実と、それが患者の情緒生活に及ぼす影響について話す準備が出来ていないと感じています。患者と私は、共に、彼らの恐れを理解しようと努力していますが、不安の原因は変わることはありません。

最近、私は教授として、また精神分析家として、ある精神分析研究所からカリキュラムにどんな新しい科目を追加したらよいかと尋ねられました。私は、気候変動による緊急事態とその心理的影響に関するコースを提案し、私の患者との経験について話しました。研究所の反応は鈍かったのです。気候の緊急事態は、心理学的に十分なものではないと考えられており、そのようなコースを設けるには、従来の精神分析理論や技法に関する授業を減らす必要があるとのことでした。また、精神分析家の候補生がこのテーマを日々の治療実践と十分に関連づけることができないのではないかという懸念もありました。しかし、精神分析は、より一般的な心理学と同様に、隔絶された真空空間には存在しないというのが実情です。私たち個人の人生は、社会と世界全体で起こっていることによって形作られているのです。精神分析家や心理学者として、私たちを取り巻く危機や、それが私たちのウェルビーングに与える影響を無視することはできません。

私は気候変動による緊急事態について、私が住んでいる地域を例にとってお話することから今日の講演を始めました。もっと多くの危機を取り上げることもできます。実際、私たちは社会的、政治的な危機に囲まれており、その一つひとつが次の危機と同じように脅威に感じられるのです。深呼吸をして、すぐに浮かび上がる脅威をあげてみましょう。世界的なパンデミック、ネオ・ファシズムの台頭、人種的な憎悪の高まり、根強い男女差別と暴力、圧倒的な所得格差、経済の不安定化、難民危機、そして核戦争の脅威の高まりなどがすぐに心に浮かびます。これらの危機が重なると、本当に乗り越えられないものに見えて、様々な感情が沸き起こります。私は、このリストを読むだけで疲れました。これらの危機は、私たちが望むと望まざるとにかかわらず、私たちの人生の一部となって、私たちの社会の構造、そして個人としての私たちの生活に、実存的な挑戦を投げかけているのです。私たちの住む世界を形成し、人間関係に影響を及ぼし、私たちの子供たちが知ることになる未来を決定するのです。

長い間、個人の内面に焦点を当て、社会、政治、自然界で起きていることを軽視してきた専門家は、今日私たちが直面している危機に対してどのように語りかけることができるのでしょうか。社会的、個人的なウェルビーングが本質的に結びついていることを認めるならば、私たちの課題は、その結びつきをよりよく理解し、精神分析がどのように対応しうるかを考えることでなければなりません。私たちが今日生きている世界に照らし合わせると、心の内的生活と社会の外的現実とを切り離すという西洋の営みは、ほとんど意味をなさないのです。私たちは、心と社会の隔たりをつなぐ道を見つけなければなりません。

Stepping Back to Move Forward　一歩下がって、前に進む

とはいえ、私たちを取り囲む社会的・政治的危機に精神分析はどう対応すべきなのでしょうか。そのようなアプローチはどのようなものでしょうか。この問いに応えられそうな答えを考えるために、私は一風変わった提案をしようと思います。それは、前進するために時間をさかのぼってみる、ということです。具体的には、1930 年代の精神分析の歴史に立ち返ってみたいと思います。当時、世界は今日と同じような危機に直面していました。このような危機に対応して、修正主義的な精神分析家の小さなグループが、人間の経験を社会、文化、政治という広いレンズを通して見るという精神分析の思想と実践を発展させたのです。その代表がドイツ系ユダヤ人の精神分析家エーリッヒ・フロムであり、その精神分析は「社会的精神分析」として知られるようになったのです。

1930 年代には、人々が互いに、そして、それぞれが置かれている文脈に対してどのように関わり合い、応答するかという問いが非常に重要な意味を持つようになりました。ヨーロッパでは、1930 年代の 10 年間は、世界恐慌、人種的憎悪の広がり、深刻な社会的不公平、民主主義の衰退など、数多くの地政学的危機によって特徴づけられていました。ドイツとイタリアではファシスト政権が台頭し、民主主義体制の安定が脅かされました。1930 年代の終わりには、ナチス・ドイツによる積極的な領土拡張は、数千万人の犠牲者を出した長く厳しい戦争を引き起こしました。戦後、世界はドイツが行ったホロコーストという犯罪の全容を知り、人間の破壊性の底深さが浮き彫りになりました。

これは私の両親の実家近くの写真です。行進の近くに見えているこのお店は、ドイツで起こったクリスタルナハト、水晶の夜と言われる反ユダヤ主義の暴動・迫害の発端となった暴動で破壊されてしまったのです。私の家族の歴史については、もう少し後で説明しようと思います。

このような地政学的な煽りを受けて、精神分析は発展していきました。多くの精神分析家は、ヨーロッパ大陸の外に避難することを余儀なくされ、ロンドン、ニューヨーク、シカゴ、ブエノスアイレスなどの都市では、精神分析の一連の実践と思考が移され、すぐにその地に確立されました。ヨーロッパから移住してきた精神分析家は、その多くがユダヤ系か政治的に左派で、自分たちのトラウマ的な喪失に対処しようとしながらも、急成長する分析思想の学派に新しいエネルギーを注入していきました。

フロムは、1920 年代後半にベルリン精神分析研究所で訓練を受けました。当時、精神分析と急進的な政治は密接に関係していました。ベルリンの精神分析は、戦争と戦争の間でワイマール・ドイツのダイナミックな文化的モダニズムと進歩的な価値観を反映していたのです。ベルリン研究所で訓練を受けた分析家の多くは、社会民主主義者や共産主義者でした。彼らは精神分析を、社会の変革に取り組むプロセスの一部と見なしていました。ベルリン研究所は、労働者、学生、貧困層のためのポリクリニックと呼ばれた無料の治療センターを設立していました。これは、精神分析は収入や社会階級に関係なく、誰もが利用できるものであるべきだという信念に基づいています。個人のウェルビーングと社会の向上が本質的に結びついていると考える、社会的意識の高い精神分析がここにあったのです。このような進歩的な視点が、フロムの考え方の根底にあるのです。フロムは、このポリクリニックとの関わりによって大きな影響を受け、フランクフルトの新しい精神分析研究所に同様のクリニックを設立し、共同設立者となりました。

しかし、ドイツの政治状況は急速に悪化し、このような進歩的な政治色のあるプログラムの維持はますます困難になっていきました。1933 年 3 月、ナチス党が政権を獲得し、全体主義的で民族国家の構想をかためるために、すぐに一連の独裁的な政策を打ち出しました。政治的反対勢力やドイツ系ユダヤ人のコミュニティは生命の危険にさらされたのです。多くの精神分析家が命からがら逃げ出さなければならず、1934 年、フロムはスイスからニューヨークへ逃亡したのでした。

フロムはニューヨークで有名な精神分析家となりましたが、彼はもともと社会学者としての訓練を受け、1922 年にマックス・ウェーバーの弟であるアルフレッド・ウェーバーの指導の下に博士号を取得したことを重要な点としてあげておきます。精神分析への関心が高まった若きフロムは、その後、妻となるフリーダ・フロム＝ライヒマンの協力を得て、訓練に入りました。1920 年代後半には、精神分析とマルクス主義を結びつけて、ドイツでの生活を形作る政治状況を分析することに取り組みました。このようなフロムの考え方は、フランクフルトの社会研究所所長マックス・ホルクハイマーに注目され、社会心理学と精神分析学の責任者として招聘されました。フロムは 1939 年までこの職を務めましたが、フロイトの解釈の違いから退任することになりました。フロムが社会調査研究所で実践的な精神分析家として果たした先駆的な役割は、長い間無視されており、それはそれで重要なテーマですが、今日の講演の枠を超えていますのでこの点には触れません。

フロムがニューヨークに到着すると、彼の出版物をきっかけに、同じ志を持つ精神分析家や学際的な研究者たちの間で活発な議論が交わされるようになりました。その代表的な人物が、アメリカの精神科医ハリー・スタック・サリヴァンと、フロムと同じドイツからの移住者であるカレン・ホーナイです。フロムは渡米後すぐにサリヴァンと出会い、彼らは互いに相手からの学びが多いと分かり、関係を発展させていきました。サリヴァンはフロムの社会心理学的研究を知り、フロムはサリヴァンから対人関係において自己を概念化する方法を学んだのです。フロムは、ホーナイとともに、文化や女性の心理についての考えを深めていきました。その後、フロム、サリヴァン、ホーナイの 3 人の仕事は、″文化学派の精神分析″と総称されるようになりました。

1930 年代半ば、アメリカ精神分析協会が会員に医師であることを求めるようになると、サリヴァンはフロイト主流派以外での精神分析の営みをフロムに保証しようと努めました。1936 年、フロムは新しく設立されたワシントン精神医学校の講師として招かれ、それを快く引き受け、1943 年には、サリヴァン、クララ・トンプソン、フリーダ・フロム＝ライヒマンとともに、ウィリアム・アランソン・ホワイト研究所を設立しました。この研究所は「対人関係精神分析」の発展で知られるようになり、私もここで訓練を受け、今日も教え続けています。

Erich Fromm’s Social Psychoanalysis　エーリッヒ・フロムの社会的精神分析

フロムは、広く知識人として、また献身的な社会主義者として、国際的な名声を得るに至りました。そのため、（彼の）さまざまな学問分野、国、大陸、言語など広範囲にわたる人生において、精神分析が一つの変わらないものであったという事実は見逃されやすいと思います。フロムを他の多くの精神分析家から一線を画し、今日でも彼の研究を意義深いものにしているのは、私たちが存在する社会的・政治的文脈から切り離して心理的な生活は決して理解できないとした点です。フロムは、社会の健全性と個

人の健全性との間に内在する関連性に関心を寄せていました。

フロムにとって、患者を援助することは、常に、私たちが人間として、社会によってどのように形成されているかを理解することが含まれています。そのためには、精神分析家は自分たちの社会がどのように機能しているかを批判的、内省的に見ることができる必要があると主張しました。しかし、それは、心理学という学問が決して単独で実践されるものではないことを理解している場合にのみ可能なことです。 フロムは、「心理学は哲学や倫理学、社会学や経済学と切り離すことはできない」(Fromm, 1947, p. ix) と、同僚によく言っていたものです。もし彼が今生きていたら、この学問のリストに「環境学」を加えていたことでしょう。

フロムは、1930 年代初頭から、個人の心理の変化は、社会のより大きな変化に起因していると主張していました。フロムにとって重要なことは、個人の中で常に社会が作動しているということです。こうした考えは、1937 年の論文『人間の衝動構造と文化との関係』において最もよく表れており、彼は社会学と精神分析学の橋渡しをしようとしています。

> *社会と個人は、互いに「対極」にあるのではなく、社会は生きている具体的な個人にほかならず、個人は社会的な人間としてのみ存在する。ある人の個人的な生活実践は、必然的に、その人の属する社会もしくは社会階級の生活実践によって決定されるのであり、また最新の分析によれば、その人の属する社会の生産手段によって、すなわち、社会がどのように生産するか、社会がその構成員の欲求を満足させるためにどのように組織されているかによって決定されるのである。生産手段の違いや社会および階級における生活の違いによって、特定の社会に典型的な異なった性格構造が発達する。さまざまな社会は、生産手段や社会政治的組織化において異なるだけでなく、個々人が異なる人間であるにも関わらずその社会の成員が示す典型的な性格構造においても異なっている。私たちはそれを「社会的性格（社会的に典型的な性格)」と呼ぶことにしよう。（フロム、1937a、58 頁、原文イタリック）*

フロムは、社会的・文化的・政治的な関係の中に個人を位置づけました。そして、それぞれの関係性の中で、これらの力がもたらす影響を明らかにしました。彼は、社会は、個人がその特定の社会が要求する役割を担うように構成されていると主張しました。フロムが特に関心を示したのは、私たちが無意識のうちにどのように個人が、その社会が期待する役割をとるのかということでした。その過程がたとえ個々人の情緒的なウェルビーングと反するものであったとしても、そのような過程は実行されると考えていたのです。

次のようなフロムの有名な発言があります。「社会的性格の機能とは、社会の構成員のエネルギーを、社会的パターンに従うか否かの意識的な決定に委ねるのではなく、人々が行動しなければならないように行動したくなるように形成することである」。言い換えれば、私たちは社会への参加を通じて、自分という人間にとって不可欠であるにもかかわらず、社会的現状への挑戦となるために表現されないままの思考や感情を封じ込めることを学ぶということです。フロムによれば、精神分析という職業は、社会で起こることと決して無縁ではありません。例えば、フロイトの精神分析の理論化は、基本的にフロイト

の社会観と彼が生きていた社会の規範によって形成されたものであると彼は示唆しました。フロイトの女性心理に関するミソジニー、女性蔑視的な考え方は、中央ヨーロッパの中産階級の家父長制的な規範の反映でありました。同じような意味で、フロイトが人を自分の欲求を満たすために他人を利用する自己中心的な存在として説明したのは、当時の社会生物学的な考え方の反映でもあります。

フロムは、フロイトの女性心理学を断固として否定し、家父長制を合理化する手段であると主張しました。フロムは、家父長的な家族構成は、普遍的な現実ではなく、特定の社会構成の産物であると主張しました。フロムはまた、フロイトの研究の中心であるエディプス・コンプレックスと欲動構造にも疑問を呈しました。フロムは、リビドーの発達段階の代わりに、人間の発達を他者との社会的関係という観点から捉えました。

1941 年、フロムは、精神分析に歴史学、社会学、政治学を組み合わせた最初の大著『自由からの逃走』を発表しました。アメリカが（日独伊の）枢軸国に対して宣戦布告したのと同じ時期に出版されたこの本は、ドイツ人がなぜヒトラーとナチス党をそれほどまでに熱狂的に支持したのかを説明しようとしたものです。フロムは、ドイツにおける権威主義の台頭を検証し、ドイツにおける権威主義的な性格構造が、民主的なワイマール共和国のもとで得た自由を放棄し、ヒトラーに服従することを特に望ませたと示唆しました。

フロムの本が際立っていたのは、精神分析的な理論と社会的、政治的な現実を織り交ぜていた点です。それゆえ、フロムは、ヒトラーに服従するドイツ人の意思をマゾヒスティックと呼んだのです。しかし、ドイツ人は同時に、破壊的な衝動を解き放ち、他者を否定し、権力を握ろうとする点で、サディズムも発揮しました。その過程によって、ホロコーストの恐怖が生まれたのです。フロムが書いているように、ナチスのイデオロギーの情緒的な魅力は、「指導者への盲従と人種的・政治的少数派に対する憎悪、征服と支配への渇望、ドイツ国民と『北方民族』の高揚」にありました。(p. 235)

『自由からの逃走』は、ファシズムの現実とそれが人間のウェルビーングにもたらす脅威を取り上げた、当時の精神分析家による数少ない著作として、特に注目されるものです。ドイツ系ユダヤ人の難民として、このテーマで発言することは個人的なリスクを伴い、かなりの勇気が必要でした。また、私が若い頃、自分のドイツ人の祖父母がなぜヒトラーとナチ党の支持者になったのかを理解するために、フロムの『自由からの逃走』を読んだのですが、それもここでお伝えしておくことが良いでしょう。それ以来、私は、ドイツ系家族の中でナチスの過去に触れていく葛藤について、私自身の家族を使ってこの過程を示そうと、幅広く文章にしてきたのです。

この写真は私が年をとってからのもので、私の祖父と母、叔母になります。私の家族も他のドイツの家族と同様に、祖父母や曽祖父母がナチ党に関与していたことに関して沈黙を守っていました。私の家族が特別ということではなく、このようなことが繰り返されていたのです。私自身の家族の背景への沈黙に関心を向けていたところ、フロムの家族の歴史における沈黙についても気になっていました。私は最近フロムとホロコーストの関係について記した本を書き終えたところですが、そこでフロムがホロコーストの間に家族に向けて書いた手紙を翻訳しました。来年にオックスフォード出版社から出版予定です。この写真は第二次世界大戦後にフロムが家族を殺されたことを知った頃撮られた写真です。このフロムの歴史はとても重要な意味を持ちます。というのは、フロムがこの本をまさに書いていた時に、彼

はドイツに残されていた家族を助けようともしていました。そのため、この本に書かれていることの論点が非常に意味を持つことになります。

『自由からの逃走』が出版されたとき、この本は広く賞賛されました。特に興味深いのは、フロイト派の伝統的な精神分析家たちが、フロムの発言に否定的な反応を示したことです。フロイト派の重鎮であるカール・メニンガーは、特に辛辣な批評で次のように述べています。「エーリッヒ・フロムはドイツでは著名な社会学者であった。彼の本は、まるで彼自身が精神分析家であるかのように書かれている」（Menninger, 1942, p.154）。メニンガーは特にフロムの学際性を否定し、社会についての議論は本質的に精神分析にふさわしくないと主張したのです。しかし、私は、社会というレンズを通して個人の情緒的な健やかさを見る能力こそが、フロムの仕事を価値あるものにしていると考えています。

> *人間の**パーソナリティに対する基本的なアプローチは、世界、他者、自然、そして自分自身と人間との関係を理解することである。**私たちは、人間は主として社会的存在であり、フロイトが仮定したように、主として自己充足的で、本能的欲求を満たすために二次的に他者を必要としているに過ぎないとは考えていない。その意味で、個人心理学は基本的に社会心理学であり、サリヴァンの言葉で言えば、対人関係の心理学である。（フロム、1941 年、290 頁、**強調**）。*

フロムの発言の順序は重要であり、繰り返し述べる必要があるでしょう。最初と最後に何が来るか注目してください。精神分析は、フロムによれば、「世界、他者、自然、そして自分自身と人間との関係を理解する」ことを目的としているのです。これは、個人の心を出発点に、社会的要因の存在を二次的にしか説明しない心理学とは正反対です。フロムは、個人を理解するためには、まずその個人が存在する世界を理解する必要があると説いています。

Clinical Illustration　臨床例

フロムの主要な考え方のいくつかを紹介したところで、今度はあまり抽象的でない話をしたいと思います。

（臨床事例であるため、抄録での掲載は割愛する。）

これらの事例が示唆するのは、精神分析が心の内面だけに焦点を当てるわけにはいかないということです。精神分析は、患者が存在する社会的、政治的なシステムに取り組む必要があるのです。しかし、フロムが示唆するように、私たちが自分ではコントロールできない力によって無意識のうちに形作られているとしたら、この問題にどのように対処すればよいのでしょうか。この過程で無意識はどのような役割を果たすのでしょうか。ここで重要なのは、フロムにとって無意識は決して個人的なものに限定されたものではなく、常に社会と織り成すものであるということです。フロムはこう述べています。

> *もし私たちが本当に無意識を理解したいのであれば、…私たちの社会の枠組みを越えなければならない。私はこのように言いたい。私たちは、自分たちの文化や社会のパターンの限界に批判的であり、自覚的である場合にのみ、無意識を完全に理解するこ*

とができるのである。もし私たちが他の人たちと同じようにそれらに捕らわれている ならば、本当に理解することはできない」(Fromm, 1955, p.180)。

フロムは、つまるところ、社会がどのように機能しているかを批判的に考えることで、私たちを無意識のうちに形成している社会的・政治的な力に光を当てることを求めているのです。私たちが社会の中でどのように存在しているのかについての認識を深めることによって、変革が可能になるのです。このことは重要な意味をもっています。フロムによれば、これは次のようなことを意味します：

心の健康は、個人の社会への "適応 "という観点からは定義できない。… 個人が健康であるかどうかは、そもそも個人の問題ではなく、その社会の構造に依存する。健全な社会は、その人が愛する能力を高め、創造的に働き、理性と客観性を発達させ、自らの生産能力の経験に基づいた自己感を持つことを可能にする。不健全な社会とは、相互の敵意と不信を生み、人を他者を利用し搾取する道具に変え、他人に服従するか自動ロボットとなる以外、自己の感覚を奪ってしまう社会である。実際、ほとんどの社会はその両方の機能を備えており、個人の健全な発達を促すことも、妨げることもできる。実際に社会はそのどちらも行い、問題は、その正と負の影響がどの程度、どの方向に行使されるかということだけである。(Fromm, 1955, p. 70)。

フロムはここで、社会がどのように機能し、私たちが誰であるかを形づくるのかについて批判的に省察することを私たちに求めているのです。このような批判的な認識がなければ、精神分析は単に患者の苦しみの一部である規範や価値観を強化することに終わるかもしれないのです。

Concluding Thoughts　最後に思うこと

結論として、私の主要な論点をもう一度言っておきましょう。今日、私たちが直面しているような環境的、社会的、政治的危機に対処するためには、精神分析が、精神と社会を分離するという伝統的な考え方を克服する必要があることを、私は提案しました。フロムが示したように、私たちは世界とのつながりを認識することによってのみ、私たちの周りで見たり経験したりしている危機の現実に目を向ける方法を学ぶことができるのです。

1976 年に出版された最後の本『To Have or To Be（邦題：生きるということ)』では、フロムは世界に存在する 2 つの方法を提示しました。一つは「持つこと」を志向するもの、もう一つは「あること」を志向するあり方です。フロムは、「持つ様式」は、物質的な商品への飽くなき渇望に代表され、やみくもに経済を動かし、環境や社会のウェルビーングを損なっていると主張しました。これに対し、「ある様式」は、世界や他者、そして自分自身と調和して生きることを可能にします。フロムは、その生涯において多くの困難に直面しながらも、決して楽観主義を失わず、私たちが互いに、そして私たちを取り巻く世界と、より平和な共存を実現できると信じていたのです。

私は今日の講演の冒頭で、環境危機と伝統的な精神分析の実践の間に存在する断絶について述べました。フロムは 1980 年に亡くなりましたが、彼の著書『To Have or To Be（生きるということ)』は、ド

イツで勃興した環境保護グリーン運動の試金石となったことは重要です。この運動は、現在、ドイツの連立政権の一翼を担っている緑の党の設立につながりました。この党は社会のウェルビーングと環境のウェルビーングは両立するという信念のもと、気候変動に取り組むことを指針としています。

精神分析家と社会学者という二つの感性を持つフロムだからこそ、個人の心だけでなく、社会のニーズについても語ることができたのでしょう。このような考え方から、私たちは多くを学ぶことができると思います。精神分析が私たちの生きる世界に有意義に対応するためには、社会の問題を理解し、それに対処する方法を考えていかなければならないのです。なぜなら社会の問題も、究極的には個人的で心理学的な問題だからです。この社会的危機の時代に、社会的精神分析に向かうことで得られるものは大きいと、私は思います。

＜休　　憩＞

第 2 部　質疑応答

司会（松下）：それでは、休憩時間をそろそろ終えまして、質疑応答の時間に移ります。まずフロアの皆様からご質問・コメントをお受けしたいと思います。折角の機会ですので、どんなことでもお尋ねいただければと思います。いかがでしょうか。

質問者 1：本日は貴重なご講演をありがとうございました。今日の先生のご講義から、非常に大雑把な要約にはなってしまいますが、治療者が政治的にリベラルな感性を持つことや視座を持つことが重要なのだというメッセージを受け取りました。とてもそこには共感しました。一方で、もし保守的な患者と臨床実践の中で出会ったときに、治療者との出会いの中で何が起こるのか、また我々がそういったときにどうしたらよいのかというアイデアをいただけたらと思います。

Frie（揖斐訳）：ありがとうございます。とても重要な質問で、いくつかの点に分けてお答えしようと思います。まず最初に、エーリッヒ・フロムは社会民主主義者であり、マルクス主義者であったということ。だからと言って、エーリッヒ・フロムは彼自身と同じような政治的・社会的な視座を皆に持ってほしいと思っていたわけではないと思っています。区別をつけることが大事だと思っていて、私たちが患者と一緒にいるときに社会的な認識を発展させていくということと、実際に政治的な運動に関わっていくということの間には区別が必要だと思っています。

フロムの目的を、彼の著作を通して感じていることですが、それは治療者や患者にとって、社会的な認識を促進させていくことだと思っています。私たち治療者がより社会的な認識を持てるようになれば、あるいは社会的なことに開かれていくことができるのであれば、より患者たちをそのように変革させることができる、そのような視座を持てるように助けることができると思っていました。彼にとっても、それから我々にとっても、その変化あるいは変革というものがどのようなものになるのかは、最初から分かるわけではないということが大切だと思います。

フロムの政治的な信念・視点に関して、私は共感するところが多くありますが、それと同時に、

私自身の見方を持っているということも大事だと思います。私が例えば、政治的に非常に保守的な患者と出会うことになって、その人の見方になかなか同意できなかったとしても、それに対して挑戦をするということが治療の目的ではないと思っています。私の役割というのは、その患者の政治的な心情というものがどのようなものであるのか、そしてそれがその患者にとってどういう意味があるのかということを理解していくことだと思っています。そしてその理解が深まれば深まるほど、その患者と一緒に省察して話し合うことができたり、変化ということに関わっていけるのではないかと思っています。

そして、この区別は大事だと伝えておきたいのですが、フロムが生きていた時代というのは、左派の見方・立場をとっている人たちがより断固とした態度をとっていたということもあって、フロムは患者との作業において正しい見方というのは困難だということを割と主張することもあったようです。これは批判ということではなくて、実際にフロムと一緒に作業をしたり、フロムの治療を受けた人たちが、フロムはこうだったと語っています。フロムの時代に関しては彼だけではなくて、このような見方はこれが正しいのだ、といった姿勢をとることがより頻繁にあった時代だったということは付け加えておきたいと思います。

そのため、区別しておきたいのは、社会的な認識を促していくということと、社会の役割がどのようなものかを理解していくということ、社会的な公平性に関してどのように関わっていくかということです。社会的な認識を促していくことは、変化をもたらすこともありますし、そうでないかもしれません。変化が起きるかどうかということは最初から私たちが分かっていることではないということです。

質問者 2：私もフロムに興味を持っています。フロムがメキシコに行ったときに、アメリカで禅活動をしていた鈴木大拙も招待して、カンファレンスを開き、そこで禅に興味を持ったようで、何か共通点があるのではないかということを語り合った記録が残っています。禅には禅問答というものがありますが、そこでは一度作り上げた社会的・文化的な考えを変えていく、一度壊すのではないかというような理解をフロムがしていて、それが精神分析とある程度共通するのではないかという点を指摘しているのですけれども、その辺りのお考えはどうですか。

Frie（揖斐訳）：とても興味深い質問をありがとうございます。1つの一般化した話になりますが、英語圏・ドイツ語圏では、メキシコでフロムが取り組んでいたことというのは見過ごされていました。非常に大事な点である、禅とフロムの関係性ですが、私の専門ではないのですが、禅が既存の政治的・文化的な事柄に対して問答していくということはとても面白く素晴らしいことだと思っていて、順序がとても大事だと思うのですが、私が今日話したことは今先生がおっしゃっているようなフロムの前の話なのです。これから禅とフロムということに関しても、私もこれから研究していきたいと思っています。

質問者 3：貴重なお話、大変ありがとうございました。エーリッヒ・フロムという人について興味を惹かれて、彼の本だけでなく、伝記などもたくさん読んでいます。その中で、先ほどの話でも患者さんに『これはこう』と見方を示すタイプの臨床家であったという話がありましたが、物事を良いものと悪いものに簡単に区別する、そういった単純な二文法であるという、フロムに対する批

判がよくあるかと思います。例えば、ネクロフィリアとバイオフィリア、死を愛することと生を愛すること、To Have or To Be（持つ様式とある様式）という形で、物事を善と悪に区別して論じるというのがフロムのスタイルかと思うのですけれども、それに対して単純な二文法ではないかというような批判がよく向けられているように思います。そういった批判に対して、先生はどのようにお考えになるかお聞きしたいと思いました。

Frie（揖斐訳）：質問ありがとうございます。今おっしゃったことは確かにそうで、彼が二文法的に考える点は、彼自身が承知することでもあります。特にフロムが 1945 年以降、第二次世界大戦以降に、非常に名声を得てからそのような傾向があります。フロムが書いた一般書的な本に対する批判が展開されていたわけですが、それがあまりにもシンプルで簡潔であるといった批判とともにあったと思うのです。その批判に対しては 2 つ言えることがあると思います。1 つはフロムが著述家として何か問題を定義する中で、そのような姿勢をとったのではないか。また、それに至るまでの歴史的文脈があるというのがもう 1 つの考え方です。1900 年代に入ったところでフロムが影響を受けた人たちがいます。そうした人たちの中には、まずフロイトがいて、性欲動、欲動に関して性愛的であるか攻撃的であるかという二文法があります。また、その一人の中にマルティン・ブーバーがいます。彼は 2 通りの人との関わり方を言っています。『我汝』というところです。私はドイツ文化で育っていますが、1900 年初頭の頃というのは、こっちかあっちかといった考え方が非常に強かったということも経験からお伝えできると思います。もちろんこれは一般化しすぎているかもしれませんけれども、こうした見方もあるのではないでしょうか。歴史家として私が考えるには、フロムのこうした行動というのがそれ以前の歴史上の中でどう影響を受けたかということも考える必要があると思います。

質問者 4：貴重なご講演ありがとうございました。生殖医療の現場で臨床心理士をしています。今日は先生のセラピストの傷つきとか恥に対すること、目を背けたくなるような、あるいは手に負えない問題とか、無力感を覚えるようなテーマについても、ご家族の歴史を交えて話してくださったことが凄いなと思って、感謝したいと思っています。先生が最初におっしゃっていた気候変動や環境を含めた臨床のあり方というのを、今の現場ではとても感じます。サケが次のサイクルにいけないということが出てきたと思いますが、患者さんたちは、例えば動物とかが危険になったら繁殖して次世代に強く耐久団を産むということとかとも関係してくるのでとても共感しました。

フロムの誰かを助けたいという気持ちから書かれた書物、『自由からの逃走』というのがあったと思いますが、誰かを助けたいと思って書かれた書物とそうでないものとの違いがあるのかと気になりました。

また、もう 1 点は生殖の現場なのでカップルが変わっていく姿というのを見ていて、とても楽観的でもあるけど悲観的でもあるというところがあって、ご夫婦関係を扱うときに、フロムというと『愛するということ』も大事になってくるかと思うのですが、先生はどのように読みこまれているか教えていただきたいです。

Frie（揖斐訳）：質問ありがとうございます。最初に 2 番目の質問からお答えしたいと思います。1 番目の質問にも関係してくると思いますし、フロムは人間愛について書いているのですが、そのこと

にも関わってくると思います。

私はフロムの愛するということに関わるアプローチは彼の仕事の土台になっていると思っています。私たちは彼の愛に関することを 1950 年に書かれた『愛するということ』に関連させようとしていますが、3,300 冊以上販売されるほど著名な本になりました。この本は、フロムが最初から愛ということに関して議論や考え方を発展させていくわけですが、その一つの紹介に過ぎないものです。そこにも、マルティン・ブーバーの『我汝』の関係や視点と非常に重なるものがあるとみています。特に、治療状況の中でこの愛ということに関しては、『我汝』の性質をもつものだと考えています。治療関係が展開していくために、他者に対して開かれていること、それから他者を前にして存在していることが必要不可欠だというふうに彼が言っています。これが愛する関係というもののベースになるものと彼は捉えていて、それは性愛的なエロティックな関係性ではなくて、相互関係的なものだと彼は捉えています。フロムは他者に対して何かを与えること、他者の前にちゃんと存在していることというのは、自分勝手なやり方ではなくできると考えています。ここから今日の講演でも言いましたけれどもフロイトの見方と違うところで、フロイトは愛ということに関して非常に主観的であると言わざるを得ません。

それから最初の質問にお答えしたいと思います。フロムの仕事が年代を通してどう変遷していったかということに関わることです。フロムのことを人としてより学んでいくうちに彼のテーマが年代を追ってみえてきます。そこには大きく 2 つのテーマがあって、1 つ目は人と人の関わり方、関係のし合い方ということで、愛するということの可能性についてです。そしてもう 1 つは人間の破壊性についてです。

これを彼はその時に住んでいる国・地域と用いた言語によって異なったように書いています。第 1 期として 1900 年から 1932 年の初期の頃、ドイツに居た頃、この時期というのは彼が学問的に記していた時期で、その時には社会的にも批判的な理論に影響されていました。次の時期として 1934 年から 1950 年代の初頭にフロムがアメリカに住んでいた時期ですが、その間に資本主義を批判するような立場になります。それから第 3 期として 1950 年から 1970 年代のフロムがメキシコシティに住んでいた時で、先ほどありましたが禅の影響を受けていた時期になります。それから最後の 10 年間がスイスで過ごした時期です。それぞれの時期に住んでいた国の規範や文化の影響を受け、そしてそれぞれ別の言語で記述をしています。そうは言っても、この 2 つのテーマに関して彼は考え続けて、それが人との関わり方や人を愛するということと、人の破壊性ということです。もう 1 つ付け加えておきたいのが、それぞれの国でフロムは精神分析の研究所を設立していて、それらは今でも成功裏に機能しているということです。

田中：個人心理療法というのは社会から隔絶したものとしてみなされがちだけれども、今日のレクチャーからそうではなくて、個人というのは最初から社会・文化・時代に埋め込まれたものであるということがよくわかりました。また、日本語で人間という言葉には、漢字で「間」という漢字が入っているので、そういう意味では人間 human beings というのは、human between であるということがよくわかりました。この点に注目した研究が、日本ではたくさん出ています。なので、今日のレクチャーでそれは日本人だけの特徴でなく、人間一般の特徴だということがよくわかりま

した。また、個人のあり方というのを社会や文化が規定するというそのあり方が、現代社会では変わってきているのではないかと思います。日本の社会では、古いルールというのが緩んできていて、卒業したらすぐに就職しないといけないとか、何歳までに結婚しないといけないとかいうのも緩んできているということに加えて、セクシャルオリエンテーション、性的指向についても同じことが言えて、自由に選べるような世の中になってきています。

質問ですが、今日の社会では、そのようにより自由度が増しているので、逆にそのことで生きるということが難しくなっているのではないかと思います。1 つの愛がより堅固な、決まったスタンダードがあるような社会、あるいは社会が要請するようなことがあった方が楽なのではないかということもありますが、その辺りについてはどのようにお考えになるでしょうか。

Frie（揖斐訳）：先生の質問自体がとても豊かでいろいろな答え方があるなと思っていて、どこから答えようかというところですが、質問からの学びがあったくらいです。「人間」ということのシンボルをお伝えいただいたことにとても感謝しています。今日の話は特に西洋的な考え方、見方です。精神分析におけるこの西洋的な視点というのは、非常に他のものから学ぶということが遅れています。ただ、その中でも個人的に他から学んでいこうとした人たちもいました。先生のおっしゃった文化的な構造がより柔らかくなってきているということですが、それは多くの国で違った形で表れていると思います。もちろん、今私が言うことはあまりフロムということではないですが、当然フロムから影響されてこのように言うということも思いながらいますが、つまりは不確かさ、あるいは社会や文化的な規範というのが変わっていく中での不確かさ、それに伴った不快感というものにどのように我々が対応すべきかということだと思います。ある一つの枠組み、ある一つの規範というものが、その方向付けを失っていく、解体されていくということは、フロムが言っている自由というのとはまた異なるものです。このことを 1950 年代終わりから 1960 年代にかけてフロムは「alienation」疎外ということで論じています。この疎外感に関して、人々が格闘してくるということを彼は書いているわけですが、文化的な文脈において違った形を示していると思います。それはセラピストとしてもそうですけれども、人としてもどのように奮闘していくかを、それぞれが考えていかなければならないことだと思っています。今のお答えになっているかはわかりませんが、今日お話ししていて、だんだん自分の方向付けを失っている感じになっています。

司会：とてもリッチなディスカッションだったかなと思います。ありがとうございました。もう一度、講演してくださった Frie 先生、そして通訳してくださった揖斐先生、質問してくださった皆様、本当にありがとうございました。ご参加くださった皆様もありがとうございました。大きな拍手で閉じたいと思います。ありがとうございました。